

ハメルンの笛吹

「ハメルンの笛吹」という話をご存知ですか。

ハメルンの町の人々はネズミが多くて困っていました。ある日町に一人の男がやってきて、お金をくれればネズミを退治してあげましょう、と言いました。町の人々は喜んで彼にネズミの退治をお願いしました。

男が笛を吹くと不思議なことに、家々からネズミが出てきて、川に飛び込んでみな溺れ死んでしまいました。

けれど町の人々は、金が惜しくなって男に金を払おうとしませんでした。怒った男は通りに出て再び笛を吹き始めました。すると今度は家々から子供たちが出てきて、男について町を出て行ってしまいました。あとにはおとなだけが残されたのです。

『グリム童話』

実は、これには大勢の子供たちがヨーロッパの町から突然いなくなった歴史上の事件が背景にあるのです。

1096～1270年、聖地エルサレムをイスラム教諸国から奪還するため十字軍遠征が行われました。しかし私欲のからだ遠征がほとんどで目的をはたせなかったため、1200年頃当時のローマ教皇インノケンティウス3世は各地に説教師を派遣し少年少女の兵員を募るよう命じました。これが少年十字軍と呼ばれています。

「それが神の御心である」という言葉にあやつられ純真な少年少女たちが喜び勇んで参加しました。その数二万人近くいたと記録に残っています。

そして子供たちが故郷に戻ってくることは二度とありませんでした。その事件が「ハメルンの笛吹」という物語として残っているのです。

当時のキリスト教会に反対できなかった親たちの悲しみがこんな形で後世に残っているのです。

子供たちはそれからどうなったのでしょうか。実は子供たちは海上を輸送されたのですが、船が難破したり、だまされてエジプトに奴隷に売られたりして、一人も聖地に到着しなかったというのが悲しい事実なのです。

キリスト教の歴史は決して平坦な歴史ではありません。幾多の事実がそこにあることを理解しておきましょう。